



Walden Pond in Concord on Dec. 22. 2007, photo by Irie



Henry David Thoreau (1817-62)

2008年度2学期木曜1時限

「哲学基礎B」

「認識するとはどういうことか？」

第12回講義(2009年1月8日)

## § 11 正当化の外在説

# Externalism of Justification

# 1、復習

## ■ 伝統的な知識の定義:

Knowledge=JTB(Justified True Belief)

- SがPを知っているとは、次のときそのときに限る。
  - ①Pが、真である。
  - ②Sは、Pを信じている。
  - ③Sは、Pを信じることに、正当化されている。

## ■ ゲティア問題

**JTB**であつても、知識であると言えない場合がある。

**ゲティア反例**

# ■ゴールドマンの知識の因果説

\* ゲティア問題に対する解決の試みとして、ゴールドマンは「知識の因果説」(causal theory of knowledge)を主張した。

\* ゴールドマンによる知識の定義

Sがpを知っているとは、事実pが適切な仕方で、Sの信念pと因果的に結合しているとき、そのときに限る。

**S knows that p, if and only if the fact p is causally connected in an “appropriate” way with S’s believing p.**

この条件を付け加えることによって、  
ゲティアの反例が知識の定義から  
除外される。

- ケース1の場合、スミスが採用され、スミスのポケットに10個のコインが入っていたことが原因となって、スミスの「採用される男のポケットに10個のコインが入っている」という信念が引きこされたのではない、ゆえに、ゴールドマンの知識の定義は満たされない。
- ゆえに、スミスの信念は、知識ではない。  
(ケース2の場合にも同様である。)

「適切に」知識を生産する因果過程には、次のものがある。

- (1) 知覚
  - (2) 記憶
  - (3) パターン1 or 2の例となっている因果連鎖、これは推論によって正しく再構成されており、それぞれは保証されている。(それらが真である場合のみ、背景命題は、推論を保証する助けになる)
  - (4) (1)(2)と(3)の結合
- 注: パターン1とはFigure1 & 2、パターン2とはFigure3を指す

## 知覚による経験的知識

$$p \rightarrow \mathbf{P}_S(p) \rightarrow \mathbf{B}_S(p)$$

事実 $p$ が $S$ の知覚 $p$ の原因となり、  
 $S$ の知覚 $p$ が $S$ の信念 $p$ の原因となる

## ■ 知識の因果説の欠点4: 逸脱因果(deviant causation)

- 事例1:
- 「俺の部屋に相棒のヴィンセントがヤクを運んでくることになっている。警察も俺を狙っているので、おれがヴィンセントと打ち合わせをして、奴が扉をノックするときに「コンココンコン」とたたくようにと言った。俺は奴を待ちに待った。ようやく扉をノックする音がした。俺は安心のあまり、ノックの取り決めのことは忘れ、外にヴィンセントがいると信じて扉を開けてしまった。ラッキーなことに扉の外に立っていたのはヴィンセントだった。ヤバかったぜ。」(戸田山和久著『知識の哲学』、p.64)

- 事例2:

- 「ヘンリーがある地域をドライブしている。彼が対象を弁別する能力には問題がない。ところが彼は知らないが、その地域には張り子というか、納屋に似せたつくりものがいっぱいあって、それらは道路からは本物の納屋に見える。ヘンリーがこの地域にさしかかって拵えものを見たら納屋にみえることだろう。彼は一軒の納屋を見たが、じつはそれは本物の納屋であった。このとき、ヘンリーはそれが納屋であることを見て知ったといえるか」(Alvin Goldman, 'Discrimination and Perceptual Knowledge', *The Journal of Philosophy*, 1976, p.773)

(土屋純一「知覚による知識」『現代哲学のフロンティア』勁草書房、p.23からの孫引き)

# 第一回レポートの課題

- 1 ゲティア反例の例を挙げなさい。
- 2 知識の因果説への批判となる逸脱因果の例を挙げなさい。

■ 復習終わり

# ドレッツキによる逸脱因果の問題の解決

- 1971年にフレッド・ドレッツキが提案した解決は、伝統的定義に次の④を付け加えるものだった。
- **SがPを知っているとは、次のときそのときに限る。**
  - ①Pが、真である。
  - ②Sは、Pを信じている。
  - ③Sは、Pを信じることに、正当化されている。
  - ④**SがP**ということを知るためにもっている理由**R**が、次の条件を満たす。すなわち、もし現実の事態が**P**でなかったなら、**SはR**をもたなかっただろう。

(戸田山、前掲書、p.64 からの書き換え)

- Fred Dretske, 'Conclusive Reasons', *Australasian Journal of Philosophy*, 49. 1971.
- Fred Dretske, *Knowledge and the Flow of Information*, Basil Blackwell, 1981.
- これによって、ゲティアの反例は、知識から除外される。また、知識の因果説の欠点の逸脱因果のケースを知識から除外することができる。

# (正当化の)外在主義

ゴールドマンやドレッキは、真なる信念の正当化のためには、適切な仕方で因果関係が存在することが必要だと考えていた。事実pによって信念pが生じること、あるいは、事実pが成立しないことによって、信念pが成立しないこと、というような因果関係である。

このような因果関係は心の外部にあり、我々が常にそれに気づいているとは限らない。真なる信念は正当化されていなければならないが、その正当化は客観的に成立していればよく、知られている必要はないと考える立場を「外在主義」という。

# (正当化の)内在主義 (internalism)

- 内在主義とは、真なる信念の正当化を、信念を持つ者が知っていることが必要であると考える立場、つまり、正当化は、心の中の認知状態によって決まると考える立場である。
- ある人がpを知っているとすれば、その人は常にpを知っていることを知っていることになる。
- 外在主義では、ある人がpを知っていても、知っていることを知っているとは限らないことになる。

# 内在主義の分類

- 1、信念論的で内在主義的な基礎づけ主義  
(**doxastic internalistic foundationalism**)
- 2、非信念論的で内在主義的な基礎づけ主義  
(**nondoxastic internalistic  
foundationalism**)
- 3、整合説 (coherentism)

1、信念論的で内在主義的な基礎づけ主義  
は、可能か？

ミュンヒハウゼンのトリレンマにより、  
不可能である。

## 「非信念論的で内在主義的な基礎づけ主義」とはどのようなものか？

- 「(a) 基礎的信念の正当化理由は信念というかたちで心の中にあるのではない。
- (b) 基礎的信念の正当化理由は**信念よりももっと原初的な何らかの認知状態**というかたちで心に抱かれている。
- (c) その認知状態は信念ではないのでそれ以上の正当化を必要としない。
- (d) しかし、その認知状態は信念に正当化を与える能力は持っている。」

- (戸田山和久『知識の哲学』産業図書、p.47

- **非信念論的な内在主義**によれば、**<もっとも基礎的な信念(命題知)は、信念(命題知)ではない認知状態によって正当化される>**という主張である。
- たとえば、「これは赤い」あるいは「ここは赤く見える」は、ある知覚によって、正当化されるのである。

# 感覚によって信念を基礎付けることが可能だろうか？

感覚や知覚によって命題を正当化するとき、私たちはどのようにそれをおこなっているのでしょうか？

これは何でしょうか？



「これは亀です」

- 真理の対応説

命題が真であるとは、それが事実と対応することである。

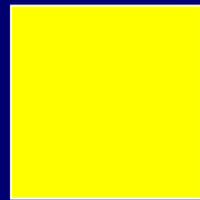
命題 「これは亀です」

事実



- 命題 「これは黄色です」

- 事実



この命題と事実は、どこが一致しているのでしょうか？

- 命題 「私の車は、青色です」
- 事実 <私の車、青色>

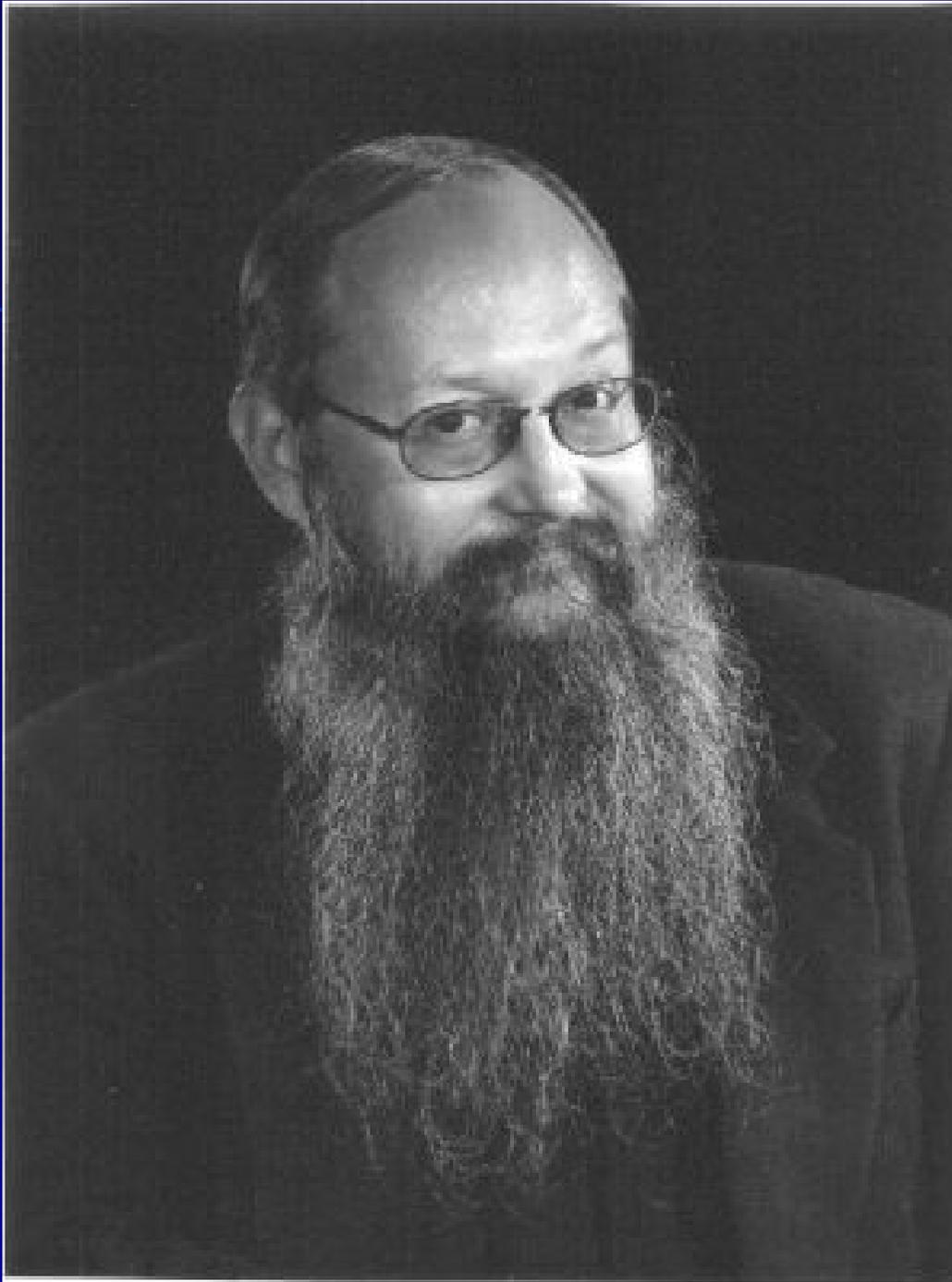
- ・事実には上のような構造があつて、その構造が命題に対応しているのでしょうか？
- ・しかし、その構造もまた命題で表現されていないでしょうか。
- ・そうだとすると、その構造を表現する命題の真偽が問題になります。
- ・この命題の真偽をまた事実との対応によって説明するのだとすると、無限に反復することになります。

感覚や知覚によって命題を正当化することに対する批判として有名なのは、セラーズ (Wilfrid. Sellers 1912-1989) が「所与の神話 (myth of the given)」と名づけた批判である。



# Wilfrid Sellars (1912–1989)





Robert Brandom



- 「セラーズは、**所与というもの**(つまり内在主義的な基礎付け主義が要求するような認知状態)は次の二つをまぜこぜにでっち上げられた幻に過ぎないとした。
- (1) 特定の対象からやってくる光や音を感覚すること、つまり感覚印象をもつこと、
- (2) どう見えるかについての命題的内容をもつ知識を非推論的な仕方でもつこと。」
- (戸田山、p51)

- 「直観や直接の気づきという認知状態が、命題的内容をもち判断的なものだとすると、たしかに他の認知状態を正当化することができるが、自分自身も正当化を必要とする。
- 逆に、そうした認知状態が命題的内容をもたず非判断的なものだとすると、こんどは正当化を必要としなくなるが、その代わりに他の認知状態を正当化することもできなくなってしまう。」(戸田山、pp.50f. )

## 蛇足：欲望に関する知識について

- 欲望についての信念は、心の非認知状態についての信念である。
- 欲望は、感覚などの非信念的認知状態と同様に、言語とは独立に存在しているのだろうか。社会的な欲望は、すでに言語によって構成されているが、そうではないような基礎的な欲望が生得的にあるのだろうか。
- もしそのような基礎的な欲望、あるいは生得的な欲望があるとすれば、その一つの候補が、「私は生きたい」という欲望(欲求)であろう。それをPとしよう。Pがあり私がそれを感じているとしよう。しかし、感覚の場合と同様に、それには概念が含まれていないとすると、「pは、「生きたい」という欲望だ」という信念を正当化することは出来ない。
- 「生きたい」という欲望は、言語によって構成されている社会的な欲望である。



# 1、これまでの復習

- 伝統的な知識の定義：
  - SがPを知っているとは、次のときそのときに限る。
    - ① Pが、真である。
    - ② Sは、Pを信じている。
    - ③ Sは、Pを信じることにおいて、正当化され  
ている。

## ■「正当化」を論理的演繹に限ると…

- もし③の「正当化」を<他の正当化された信念からSが論理的に導出することである>とすると、他の正当化された信念の正当化が問題となり、無限遡行となる。ミュンヒハウゼンと同様の問題が生じて、信念の正当化は不可能となり、どのような知識も持ち得ないことになる。

## ■すべての信念が、何らかの正当化を持つとすると・・・

- 我々が何かを信じるとき、何らかの正当化を行っている。何の正当化もなく何かを信じるということは通常はないだろう。そこで、すべての信念が何らかの正当化を持っているとすると、ほとんどすべての信念は正当化されていることになり、②と③を区別する意味はなくなる。そうすると、知識の定義は①と②を満たす信念ということになる。つまり、「知識とは、真なる信念である」という定義になるだろう。

## ■「非信念的正当化」を考えてみると…

- 次のように非信念的に「正当化」を考えてみよう。
- 「信念Pが正当化されているとは、他の正当化された信念Qや感覚や知覚などの非信念的な認知状態から、Pが導出されることであり、最も基礎的な信念は、非信念的(nondoxaitic)な認知状態によって基礎付けられている。」
- しかし、感覚や知覚だけから、なんらかの基礎的な信念を導出することは、困難であった。これは「所与の神話」として批判されていた。



- では、外在主義がただしいのだろうか？

# 外在主義の問題点

- 外在主義の問題点：感覚や知覚を因果説で説明できても、それについての命題知を因果説で説明することは出来ない。（「所与の神話」への批判）
- しかし、もし心身問題に関して一元論の立場をとるならば、  
＜Pという事実から、ある知覚が因果的に生じて、その知覚からさらに「p」という命題知が因果的に生じる＞  
と理解することも可能になる。
- その場合には、知識の因果説によって、知識を基礎付けることが出来ることとなります（認識の外在的基礎付け主義）。

認識の外在的基礎付け主義のためには、次の二つの証明が必要である。

(1) Pという事実からある知覚が因果的に生じていることの証明

ある脳状態がある知覚と同一であること(同一説)、あるいはある脳状態はある知覚が随伴すること(**supervene**) (随伴現象説)を証明しなければならない。

(2) ある知覚からそれに関する命題知が因果的に生じることの証明

もし、(2)は証明できず、(1)しか証明できないのだとすると、そのときには、世界との因果関係によって基礎付けられるのは、感覚や知覚だけであることになる。

そうするとそこから他の命題知を基礎付けることは出来ないことになる。

# ミニレポートの課題

- これは何ですか



これは赤い四角です。

- なぜそういえるのか、その理由を説明してください。











